

プロローグ

視界の端が、毒々しい蛍光の緑色に甘く滲んだ。

野営の焚き火。その爆ぜる火の粉すら、まるで水中で揺らめく光の尾のように輪郭を崩し、網膜の奥で尾を引いて溶けていく。

頭の芯が妙に熱く、ぐにやりと重たい。脈打つたびに、皮膚の内側で名も知らぬ毒の花が咲き誇るような、甘ったるい痺れが手足の先へと広がっていた。

「おいアルマ……お前……さっきのスープに何を入れた？」

「何って……森の奥で採れた真つ赤な大きなキノコだが？ 毒見なら済ませた。味も悪くなかったぞ？」

「それを世間じゃ『毒キノコ』って呼ぶんだよ……このボンコツ剣士が……っ！」

きょとんとした顔をする女剣士に、怒声とともに胸ぐらの一つでも掴んでやりたかった。

だが、喉の奥から漏れ出たのは拍子抜けするほど高く、小刻みに震える甘い吐息ばかりだ。舌が熱で上顎に張り付き、男の威厳を込めようとした罵倒は、あられもない誘い水のような嬌声に化けて夜気に消えていく。

身体が言うことを聞かない。かつて大怪物の強靱な皮すら千歩の距離から射抜いた俺の剛腕は、いまや落ち葉の上に転がる小枝のように白く細く、ただただ無様に打ち震えていた。

「おい、どうしたレナリア？ 顔が赤いぞ……？ 寒くて震えているのか？」

「触るな……っ、近寄るな……あッ!?」

悪気の一片すら感じさせない透き通った瞳が、無遠慮に覗き込んできた。

この大陸でも片手に入る実力と美貌を持つであろう女剣士、アルマ・ローレンス。身の丈ほどもある大剣を羽毛のように扱うこの女は、こと生活能力とサバイバルの知識にかけては壊滅的に頭のネジが抜け落ちていた。

俺の威嚇などそよ風ほどにも感じていない様子で、アルマは無防備に膝をついた。その拍子に、俺の荒い呼吸に合わせては

だけた毛布がずるりと肩から滑り落ちる。

「……おいおい、レナリア。いくら暑いからといってそんな恰好で……」

「見、てんじや……ねえよ、変態……っ！」

汗ばんだ肌にびたりと張り付いた薄手の衣服があらわになり、細い鎖骨や華奢な輪郭が容赦なく晒される。それだけではなく、薄い布地を押し上げるようにして、毒の熱と過敏な興奮に耐えかねた未発達な先端——ぶくつと硬く尖った乳首の形が、くつきりと浮き彫りになってしまっていた。

「ほう？　ここがやけに尖っているな」

何を思ったのか、アルマの指先がその硬直した突起を服の上から容赦なく小突いた。

「ひゃうんツ!?　ふ、ああッ……!？」

雷に打たれたような電撃が背筋を駆け抜け、喉の奥から情けないほどの甘い嬌声が跳ね上がる。ピクンと小刻みに背を反らせた俺は、涙目で胸元を掻き抱きながら甲高い声で怒鳴りつけた。

「な、何すんだこの筋肉ダルマ……ッ!　どこ触ってやがんだ……っ!」

「なんだその声は。それに、どうしてお前はそんなに発情しているんだ？」

アルマは心底わけがわからないとでも言いたげに、きよんとした不思議そうな顔で首を傾げている。その無邪気さが、今の俺にはどんな拷問よりも腹立たしい。

「いいか……っ、よく聞け……!　お前がさつき鍋にぶち込んだあのキノコはな……幻覚と、ふあっ……!　発情を促す、最悪の淫毒キノコなんだよ……っ!」

「む？　だが、私はなんともないが……」

「お前みたいな規格外の化け物剣士の頑丈な胃袋と、非力な今の俺の身体を……」緒にするな……っ、んんツ!」

ざりつと奥歯を噛み締めても、身体の奥から湧き上がる衝動に抗いきれず、思わず全身がガタガタと震える。

下腹部の奥がきゅんと甘く締め付けられ、熱い蜜がじわりと溢れ出して下着を濡らしていくのが嫌というほどはつきりと分かかってしまう。

（くそっ……！ 野營だつてのに……着替えたくても予備の服なんてねえし、身体に力が入らなくて脱ぐことすらできねえとは……っ！）

睨みつける俺の顔は、屈辱と毒の熱で真っ赤に茹で上がっていたはずだ。

だが、今の俺の姿を客観的に見ればどうだ。

男の魂がどれほど凄んでみせようと、外見は泉の呪いによつて作り替えられた、色素の薄い金髪に華奢な肢体の少女でしかない。

大人の男の半分ほどしかない肩幅。べたんこの胸。そしてサイズが合わずに緩んだ布地の隙間から覗く、汗ばんだ太ももと頼りない布きれ一枚。

俺が怒りの目で睨みつけているつもりでも、相手から見れば『潤んだ瞳で発情して喘ぐ、無防備きわまりない小娘』そのものなのだ。

「そんなに睨むな。ほら、身体がこんなに熱い……それに、なんだか随分と甘い匂いが立ち上っているぞ」

「ひっ……な、にを……ッ！」

ひょいと仔猫でも拾い上げるような軽さで、俺の身体が抱き上げられた。

抗おうと伸ばした指先は、アルマの鍛え上げられた胸当てを頼りなく引つ掻くだけ。そのまま厚い毛布の上へと押し倒され、彼女のずっしりとした体躯と、豊かな胸の柔らかさが逃げ場を塞ぐように覆いかぶさってくる。

「冷やすべきか、暖めるべきか……だが、唇まで濡れてこんなに艶めいている。まるで極上の蜜を塗った果実のようだな」

「耳元で、喋るな……息が、熱い……っ！」

耳を掠める低く甘い声。その微かな震動すら、今の過敏になりすぎた神経には鋭利な快感の針となつて背筋を駆け上がる。下腹部の奥が、キュンと暴力的な熱さで疼いた。この女の身体は毒の熱と他者の体温で過剰なまでに反応し、俺の意思とは無関係に蜜を滲ませ、熱狂的に脈打っている。

（ふざけるな……！ 俺はレナリアだぞ！ 『最速の神射手』と呼ばれたSランクハンターだったんだ……っ！ こんな、小娘の身体の衝動なんかに……っ！）

頭の芯では血を吐くような男のプライドが猛り狂っている。

だというのに、視界を塞ぐように覆いかぶさってきたアルマのずっしりとした重みと、甘やかな体温から逃げることもできない。

「なるほど、毒による発情か。ならば話は早い。その熱を発散させてやれば治まるんじゃないか？」

「ば、バカ言え……っ！ 待て、やめろ、どんな短絡思考だこの筋肉脳……ッ!?」

慌てて突き放そうと伸ばした腕は、触れた甲冑の冷たさにすら痺れを覚え、力なく毛布を掴むだけ。抗う暇もなく、俺の華奢な肩は毛布の上へと完全に押し倒されていた。

「暴れるな。毒の巡りが早くなるぞ」

「お前のせいだろうが……っ、ひやうッ!?」

服の薄布越しに、硬直していた胸元の突起を、アルマの無骨な指先が容赦なくキュツとつまみ上げた。脳天を突き抜けるような電撃。

小娘の身体に変えられて以来、異常なまでに神経が過密化したそこを摘まれ、転がされるたび、奥歯の隙間から情けないほど甘い嬌声がこぼれ落ちる。

「く……っ、指を、離せ……あ、ああッ!!」

「嫌がつている割には、随分と可愛い声が出るな……ほう、下もすでにこんなに濡れているぞ。これもキノコのせいかな？」服の裾から無遠慮に滑り込んできた指先が、熱を帯びた下着の奥の窪みを捉える。

すでに蜜で濡れそぼり、じくじくと熱を放つ秘所を暴かれ、俺は屈辱に顔を真っ赤に染め上げながら歯を食いしばった。

「そ、そうに決まってるんだろ……っ！ 全部、お前の毒鍋の……あ、うぐッ!?」

「そうか？ お前はすぐ熱くなるから、毒のせいかもしれないものとか、私には判別がつかないな」

「減らず口を……叩くな……っ!」

「まあいい。私の不手際だ。いつも通り気持ちよくいかせてやるから、それで許せ」

「許すかバカ……っ！ い、いい……いいから手を離せて……んああああッ!」

反論は、逃げ場のない破壊的な快楽によって強引に掻き消された。

もつとも過敏に尖りきった突起を、アルマの指の腹でじつくりと押し潰すように圧迫される。それと同時に、ぬらりと溢れた蜜を纏った二本の指が、狭く熱い腔穴へと躊躇なく滑り込み、浅く深く蠢き始めた。

グチュ、と夜の静寂に不躰な水音が響く。

指先が内側の熱い襞を撫で回し、擦り上げるたびに、下腹部をぎゅつと絞り上げられるような強烈な痺れが背筋を跳ね上げる。

「ひ……っ！ ま、待て……待つてくれ、ダメだ、そこ……っ！ あ、ああッ！」

「待てと言われてもな。お前のここ、私の指を離したくないみたいに、きゆうきゆうと締め付けてくるぞ」

「ば、かつ……誰が……っ！ 締め付けて、なんか……んっ！」

「嘘をつくな。指を曲げるたびに、熱いのが溢れて止まらない。ほら、ここを少し擦ると、腰が勝手に浮く」

悪気など微塵もない、あまりに淡々とした観察眼。剣の太刀筋を確かめるかのような無骨で純粹な物言いが、かえってレナリアの羞恥を極限まで煽り立てる。

威勢のいい罵倒を叩きつけてやりたいのに、舌が熱に蕩けて痺れ、男らしい口調は快楽の波に吞まれて無様に崩れていく。抗いたい。こんな小娘の身体に屈したくない。かつて数多の修羅場を越えてきた最上位ハンターの矜持が「拒絶しろ」と激しく警鐘を鳴らしているのに、この過敏な身体は撫でられるだけで甘く跳ね、蜜を滴らせて歓喜の声を上げるのだ。

「声……っ、耳元で、喋るな……っ！ この、筋肉ダルマ……あんっ！」

「口では憎まれ口ばかり叩くのに、身体はこんなにも素直で可愛いな……レナリア、お前のこういう声、私は嫌いじゃないぞ」

「誰が……可愛いだ……っ！ ふざけ、んな……っ、ああッ、ひやうッ!?」

「力をもつと抜け。そんなに強がつて奥を窄められたら、私の指まで抜けなくなってしまう」

天然ゆえの容赦のない言葉責め。その一言ひとことが鋭利な刃となって男の自尊心を切り刻み、そして皮肉なことに、その耐え難い屈辱こそが、雌の肉体を狂おしいほどに疼かせていく。

屈辱で涙が滲むほど、下腹部の奥から湧き上がる熱波は強まり、二本の指が出し入れされるリズムに合わせて華奢な腰がみつ

ともなく跳ね、アルマの手首に縋りつくように震えた。

「ほら、また声が高くなった……ここが好きなんだな？」

「ちが……っ、やめ……そこ、ぐりぐり、掻き回すな……っ！ ま、まえが……っ、らめえ……っ！」

「前か？ クリも指で転がしてほしいのか？ 欲張りだな」

「そうじゃ、ない……っ！ 言葉を、曲解するな……あああーっ!?」

限界だった。

もつとも敏感な箇所を逃げ場のない角度で抉り潰された瞬間、視界の緑の毒光が純白の閃光へと弾け飛び、俺の意識は強烈な絶頂の波の中に呑み込まれた。

ピクピクと全身を小刻みに痙攣させ、喉からあられもない甘い悲鳴を撒き散らしながら、背中を弓なりに反らせる。

内壁がアルマの指を貪るように激しく脈打ち、熱い蜜が指を伝ってシーツを濡らしていく。思考のすべてが真っ白に焼き切れ、ただ乱れた熱い吐息だけが、焚き火のはぜる夜の森へと溶けていった。

だが。

白く蕩けきつた頭の、その冷酷な一番底で。

俺の男の魂は、決して消えない黒々とした焰を静かに燃え上がらせていた。

(……許さねえぞ……クズどもが……)

俺を裏切り、こんな惨めな身体へと貶めた、あの三人の顔が脳裏に刻みつけられる。

ポンコツな女剣士の手の上で、小娘のように啼かされるこの屈辱のすべて。その利息まで含めて、奴らには必ず一滴残らず支払わせてやる。

俺は荒い息の下で、冷たく刃を研ぐように復讐を誓っていた。

第一章

湿り気を帯びた洞窟の冷気が汗ばんだうなじを撫でていく。

頭上の闇で、かすかに爪が岩肌を引っ搔く不快な軋み音が三つ。

俺は歩みを止めることすらなく、背負った大弓の弦へと滑らかに指を滑らせた。

「おい、上だ!」

「ひっ……ガーゴイルか!」

背後で情けない悲鳴を上げたのは、前衛を張るはずの剣士と武道家だった。抜剣の金属音がやけに甲高く、耳障りに洞窟内へ反響する。

焦るな、と口に出すまでもない。

肺を満たす冷たい空気とともに精神を研ぎ澄ます。

鋼の弦が指先を噛む感触。強靱な体幹を一本の軸へと固定し、剛弓を限界まで引き絞る。指を離す瞬間、肉と骨が軋みをあげるその抵抗感こそが、俺という男の生命の昂ぶりそのものだった。

——スパアンツ!

放たれた一本目が、急降下してきた一体目の喉笛を正確に射抜く。

矢筒から引き抜く指の動きに淀みはない。二本目、三本目。弦の唸りは重なり合い、まるで一息の風が吹き抜けたかのようだった。

三体の魔獣は悲鳴すら上げることなく、粉々に砕けた岩屑となつて俺たちの足元へ降り注いだ。

「ふう……静かに歩けと言ったはずだぞ、お前たち」

弓を軽く回して肩へ担ぎ直し、吐き捨てた息に薄く笑みを滲ませる。

この程度の雑魚、息継ぎの合間に処理するようなものだ。

「相変わらず……すげえ腕前だな、レナリア」

剣士が喉を鳴らし、引きつった笑みを浮かべながら鞘に剣を収めた。

「人間業じゃねえよ。暗闇で三体同時、急所だけを撃ち抜くなんざ……」

武道家が肩をすくめ、魔法使いもまた青白い顔でペコペコと法衣の裾を正す。

「大したことじゃねーよ。最深部にいたあの牛の化け物に比べれば、赤子の相手をしているようなもんだ」

思い返せば、先ほど踏破したばかりの迷宮の最深部。

あの巨大なミノタウロスとの死闘もそうだった。咆哮一つで空気を震わせ、巨木のような石斧を振り回す怪物を前に、この三人は腰を抜かして逃げ惑うことしかできなかった。

奴らの無様な逃走劇を視界の端に収めながら、俺は一人で間合いを支配したのだ。

突進の軸を狂わせるために右の眼球を射抜き、分厚い腱を裂いて足を止めした。

そして頑強な胸筋のわずかな隙間。心臓へと続く急所へ、寸分違わぬ軌道で三本の矢を重ねて打ち込む神技『継ぎ矢』。

矢が矢の矢尻を押し込み、分厚い肉と骨を強引にこじ開けて心臓を貫いた瞬間、怪物の巨軀は大地を揺らして崩れ落ちた。すべては、俺の弓一本がもたらした完全な勝利。だが、俺は己の手柄を誇示するつもりなど毛頭なかった。

「お前たちが化け物の気を引いてくれたおかげで、狙いが定まっただけだ。礼を言う」

大人の余裕を含めた皮肉混じりの冗談を口にする、三人は一樣に安堵したように相好を崩した。

「謙遜すんなよ、全部あんたの功績だ」

「ああ、天下のSランクハンター様と組めて、俺たちは本当に運が良かった」

賞賛の言葉を浴びせられながら、俺は胸の奥で静かな充足感を噛み締めていた。

どんなに無様でも、臆病でも、こいつらはここまで俺についてきた仲間だ。背中を預け、泥を吸りながら迷宮の底まで潜り抜けてきた。

(……無事に、地上へ連れて帰ってやるさ)

男としての矜持。そしてパーティを率いるリーダーとしての使命感。

肩に食い込む大弓の確かな重みと、手のひらに残る剛力の手応えを感じながら、俺はかつてないほどの安心感の中で、彼らへの警戒を完全に解いていた。

迷宮の空気が、ふと冷涼な湿り気を帯びたものへと変わる。

視界が開けた先には、底の知れぬ巨大な縦穴が広がっていた。

暗黒の口を開けた断崖。遙か底のほうから、仄かに怪しく揺らめく燐光と、絶え間なく水滴が落ちる湿った残響が這い上がってくる。

「ふう……ここで少し息を整えるぞ」

俺は大弓の重みを肩から外し、断崖の縁に腰を下ろして革袋の水を一口含んだ。喉を潤す冷たさに、過酷なダンジョン攻略の緊張が心地よくほどけていく。

「なあ、レナリア。あの底に光っているのは何なんだ？ 水場があるなら、少し汲んでいかないか？」

剣士が崖下を覗き込みながら尋ねてきた。

「よせ。あそこには近づくな」

俺は首を振り、低く落ち着いた声で忠告を口にする。

「この洞窟には古くから伝わる噂がある。あの崖下の泉には、得体の知れない毒や肉体を冒す変異の呪いが満ちているとか。真偽は知らんが、わざわざ確かめる価値もない。水も携帯食料もまだ十分に残っているんだ。無駄な危険を踏む必要はあるまい」

「そうか、あんたがそう言うなら間違いないな」

「ああ。慎重すぎるくらいで丁度いいのが迷宮の鉄則だ」

仲間たちを気遣い、父親のような余裕を含んだ笑みをこぼしながら俺は立ち上がった。

背負い袋の紐を締め直し、地上へと続く上層ルートを確認するため、ふっと彼らに背を向ける。

その、完全に無防備となった一瞬だった。

——ドスッ。

鈍く、重い衝撃が背中を中心を貫いた。

「がっ……、は……っ!?」

息が一気に吐き出され、視界が真っ赤に明滅する。

遅れて押し寄せてきたのは、背骨を焼き切るような激痛。肋骨の間隙を縫って、刃が深々と肉の奥へ、臓腑の寸前まで突き立てられていた。

「な……に、を……っ?」

理解が追いつかない。

背後から伸ばされた太い腕が、俺の首を強引に絞め上げ、そのまま固い岩肌へと押し倒した。

ドサリと仰向けに組み伏せられた俺の視界に飛び込んできたのは、先ほどまで従順に頷いていたリーダー剣士の、醜惡な歡喜に歪みきった顔だった。

「ぐ、ああッ……! き、さま……何の、真似だ……っ!?」

「何の真似、ねえ……? ハハッ、見て分からねえかよ、天下の神射手様?」

剣士は唾を飛ばしながら、下卑た笑い声を漏らす。その瞳には、先ほどまでの敬意など一片もなく、ドロドロと煮えたぎる嫉妬と悪意が渦巻いていた。

「お前みたいな平民上がりのクズがよお……いつまでも英雄気取りで、俺たちの上に立つて指図してんのが、ずうっと鼻に付いてたんだよ!」

「な……ぜだ……っ、俺たちは……仲間、じゃ……!」

「仲間あ? 笑わせんな! どうせお前一人だけが美味しいところをかつさって、ギルドからも民衆からもチャホヤされや

がるんだろう？ 最深部を踏破した栄光も、莫大な財宝も、貴族の旦那方へのコネも……お前が死にさえすれば、ゼーんぶ生き残った俺たちのものになるんだよ！」

組み伏せられた胸元を、剣士の膝が容赦なく踏みしめる。

息が詰まり、激痛で視界が白く濁っていく。

信じていた。命を預け合い、背中を任せていたはずの仲間たち。その信頼が、たった一本の刃と剥き出しの強欲によって、音を立てて粉々に砕け散っていく。

誇りも、積み上げてきた武功も、すべてを足蹴にされる耐え難い屈辱と絶望が冷たい毒のように俺の心臓を締め付け始めていた。

「ぐ……っ、離せ……ッ！」

背中への刺し傷から溢れ出る熱い血が、冷たい岩肌を濡らしていく。

屈辱と激痛に震む視界の中、俺は意地だけで右腕に力を込め、のしかかる剣士の喉笛をへし折ろうと手を伸ばした。まだ動く。この剛腕さえあれば。

「おやおや、往生際が悪いですねえ、リーダー」

ねっとりとした嘲笑とともに、横合いから伸びてきた影が俺の手首を力任せに踏みつけた。

魔法使いだ。奴は懷から怪しげに蠢く紫黒色の小瓶を取り出すと、陰湿な笑みを浮かべて俺の顔の横にしゃがみ込んだ。

「アンタの頑丈さは嫌というほど知っていますからね。確実にくたばってもらうため、特別に調合しておいたんですよ。『神經を焼き、魔力と筋力を根こそぎ奪う猛毒』をねえ」

「や、め……ろ……っ、貴様ら……ッ！」

「ほら、お口を開けて？ 神射手様あ」

魔法使いの冷たい指先が俺の顎を無理やりこじ開け、汚らわしい薬瓶の口を喉奥へと直接ねじ込んできた。

ドロリとした粘液が食道を滑り落ちていく。焼けるような熱気と、脳髓を直接引っ掻くような激しい痺れが、一瞬にして全身の血管へと駆け巡った。

「ゴホッ……!! ガハッ、ゲホッ……!!」

咳き込み、嘔吐しようとするが、薬効は容赦なく俺の肉体を内側から腐食させていく。指先から急速に力が抜け、鋼の弓弦を引き絞るための四肢が、まるで鉛の塊のように重く沈んでいく。

動かない。力が入らない。

全身の筋肉がドロドロに溶かされていくような、悍ましい無力感。

「おいおい、まだ生きてんのかよ？」

そこへ、下卑た笑い声を響かせながら武道家が歩み寄ってきた。

奴の手には、俺が命の次に関切にし、数多の死線を共に潜り抜けてきた愛用の大弓が握られていた。

「おい……よせ……それ、は……っ！」

掠れた声で手を伸ばす俺の目の前で、武道家は無慈悲に足を振り上げた。

——バキィッ!!

乾いた破壊音が、静まり返った迷宮に無惨に響き渡る。

幾千の魔獣を屠り、俺の指先の皮膚と汗を吸い込んできた最高峰の名弓が、ただの薪のように無残にへし折られた。

「あ……あ……っ……」

「ハッ! 化け物との戦いで俺達に偉そうに指図しやがった落とし前だ! 『下がってる』だあ? 調子に乗りやがって……

死人にこんな上等な武器は要らねえよなア!」

武道家は折れた弓の残骸を俺の顔の横に放り捨てると、無抵抗になった俺の革鎧を乱暴に剥ぎ取り、懐の財布や貴重な魔石、ギルドの認識票までも強引に奪い取っていく。

仕上げとばかりに、俺の額に向けてベツ、と汚らしい唾を吐きかけた。

「クズが……っ! 俺が……俺がどれだけ……お前たちを……っ!」

「どれだけ助けてやったか、って言いたいのか？ 感謝してるぜえ？ アンタのおかげで、俺たちは無傷で『迷宮を踏破した歴史的英雄』になれるんだからな！」

視界が滲む。それが悔し涙なのか、毒のせいで瞳孔が開いているからなのかすら分からない。

命を救ってやった恩を仇で返され、積み上げてきた手柄を奪われ、命乞いすら娯楽のように嘲笑われる。

何より、己の分身であつた弓を折られ、男として、一流のハンターとして誇り高く生きてきた尊厳のすべてを、泥靴で踏みにじられた。

毒が心臓へと迫り、指一本動かせない。

かつて大陸に名を轟かせた威厳は跡形もなく砕け散り、俺はただの惨めな肉塊として、冷たい岩肌に転がされているだけだつた。

「おい、もういいだろ。こんな虫けらに構ってないで、さっさと片付けようぜ」

武道家が財布の重みを確かめながら、飽きたように吐き捨てる。

剣士と魔法使いは下卑た笑みを浮かべ、麻痺してピクリとも動かない俺の身体を、まるでゴミ袋でも運ぶような手つきで引きずり始めた。

ゴツゴツとした岩肌が、剥き出しになった背中を容赦なく削る。

運ばれていく先——そこは、底知れぬ暗黒が口を開ける断崖の縁だった。

「ひひっ、ここから落とせば死体すら上がらない。完璧な『行方不明』、いや『名誉の戦死』の完成ですねえ」

「じゃあな、元・英雄さんよ。せいぜいそこで腐り果てな」

嘲笑とともに、剣士の重いブーツが俺の鳩尾を力任せに蹴り抜いた。

身体が宙に浮く。

「ッ!!」

声すら出ない。

視界の端で、崖の上に立つ三つの影が、手柄と名声を独占した歓喜に肩を揺らしながら小さくなっていくのが見えた。

暗黒の浮遊感。

風切り音が耳を裂き、重力に引かれて奈落の底へと真つ逆さまに落ちていく。

そして――。

凄まじい衝撃とともに、全身が冷たい液体に包まれた。

落下した先は、先ほど自らが近づくなと警告した、あの泉。

冷たい水底へと深く、深く沈んでいく。

息ができない。

肺が苦悶に満ちる中、恐ろしい異変が始まった。

(な……んだ、これは……っ!?)

体内に巡っていた魔法使いの猛毒と、泉を満たす得体の知れない禍々しい魔力が、水中で暴力的に融合し、皮膚の毛穴という毛穴から体内へと浸透してくる。

激痛ではなかった。

それは、全身の細胞、骨格、筋肉の繊維一本一本がドロドロに溶かされ、全く別の何かに再構築されていくような、悍ましく甘美なまでの造り替えの感覚。

太く硬かった骨組みが軋みを上げて縮み、剛腕の筋肉が削ぎ落とされ、滑らかな柔らかい肉へと変貌していく。

肉体が、根底から書き換えられていく感覚。

だが、意識が漆黒の闇へと溶け落ちる寸前。

冷たい水底で、俺の魂の芯だけは狂おしいほどに澄み渡っていた。

(殺す……ッ！ お前たちだけは……絶対に許さない……！ 必ず生きて這い上がり、お前たちを地獄の底へ叩き落としてやる……ッ!!)

男としての最後の執念と、暗く燃える復讐の焰を胸の奥底に刻みつけながら、俺の意識は冷たい泉の底で静かに途絶えた。

（……生き、ているのか……俺は……）

湿り気を帯びた冷たい岩肌の感触。重い瞼を押し上げると、そこは幾重もの階層を隔てたダンジョンの最下層。日の光も届かぬ奈落の底だった。

記憶の糸を手繰り寄せる。

毒を盛られ、崖下へと突き落とされた。暗黒の浮遊感。そして、あの禍々しい燐光を放つ泉への落水。

俺は息を荒らげながら、這うようにして冷たい泉の浅瀬から岩場へと這い上がった。びしょ濡れの身体がガタガタと震える。ふと、背後から突き刺されたはずの激痛がないことに気づき、俺は咄嗟に自分の背中へと手を伸ばした。

（……傷が、ない……？）

革鎧越しに触れた背中中は、完全に塞がっていた。あれほど深々と短剣を突き立てられ、臓腑すら裂かれたはずの致命傷だというのに、血の一滴すら滲んでいない。滑らかな皮膚が再生しているだけだった。

（この泉……毒や変異じゃなく、並外れた治癒の力を秘めていたっていうのか……？）

命拾いした。その安堵が胸をよぎった、まさにその刹那だった。

岩肌に手をつき、ぐつと身体を起こした瞬間。

ズサツ、と間の抜けた音を立てて、身にまとっていた革鎧や衣服のすべてが足元へと滑り落ちた。

「……っ!?」

布地が地面に崩れ落ち、ダンジョンの凍えるような冷気が、剥き出しになった素肌を無防備に撫でる。だが、寒さよりも先に、眼前に広がる光景への強烈な違和感が俺の思考を凍りつかせた。

足元に落ちた衣服は、まるで巨人の服でも着ていたかのようにプカプカで、異様な余白を残している。

そして、自分の手元を見下ろした俺は思わず息を飲んだ。

そこに伸ばされていたのは、かつて剛弓の弦を硬く引き絞っていたはずの、節くれ立った屈強な男の腕ではない。透き通るように白く、細く、小枝のように折れそうな小娘の手指。

「は……？ な……にが……」

自分の口から漏れ出た声に、俺は絶句した。

聞き慣れた低く落ち着いた自分の声ではない。喉の奥から零れ落ちたのは、拍子抜けするほど可憐で頼りない、高めの少女の声だった。

慌てて己の身体を確かめるように両手を這わせる。

厚く硬い胸筋は綺麗さっぱり削ぎ落とされ、手のひらにすら収まらないほど平坦な膨らみしかない。くびれた華奢な腰、

短く細い太もも。

そして恐る恐る股間へと手を伸ばせば、そこにあつたはずの男の証は影も形もなく、ただ滑らかな割れ目と、湿った未知の窪みが残されているだけだった。

「な、なんだこれ……っ!? なんで……俺の身体が、こんな……ッ!?」

薄暗いダンジョンの底に、信じがたい現実を突きつけられた少女の悲鳴がこだました。

「呪い……!? あの野郎ども、俺に何かやりたがったのか……っ!?」

慌てて動こうとするが、腰回りの布地の違和感に制限される。

男の体軀に合わせて揃えた革鎧もインナーも、いまの縮みきつた身体には何一つ合わない。立ち上がれば、ただの素っ裸。生まれたての赤子同然の無防備な姿で、冷たい迷宮の空気に晒されてしまう。

「くそっ、これじゃあ動くことすらできねえ……!!」

俺は足元に転がっていた革ベルトと予備の仕込みナイフを拾い上げた。

鋭利な刃先でブカブカの上着をざっくりと裂き、余分な布をベルトで強引に縛り上げて、なんとか小娘の華奢な身体を覆う応急の衣服へと調整する。べたんこの胸元も、細すぎる腰回りも、布で隠せば少しは落ち着くが、擦れる感触のすべてが未知

の違和感となって肌を刺激した。

服を整えながら、俺は激しく明滅する頭の芯で状況を整理しようと試みた。

だが、どれほど思考を巡らせても、論理的な答えなど出てこない。

性転換。

数多の死線と修羅場を乗り越え、鋼のように鍛え上げてきた俺の肉体が、どこからどう見ても年端のいかない駆け出しの少女……いや、貧乳の小娘の容姿に成り果てているという、圧倒的な事実だけがそこにあった。

あの魔法使いの毒のせいかな？ いや、毒だけでここまで骨格や性別が根こそぎ作り替えられるはずがない。となれば……この泉か。古くから語り継がれていた忌まわしき作用。

短剣で背中を貫かれたあの致命傷は完全に消え去り、傷跡すら残っていない。

傷は治った。その代償として、女の身体へと造り替えられた。そう考えるのが一番自然だった。

「ふざけやがって……！」

情けなさで怒りで奥歯が軋んだ。

だが、失われたのは筋力と男の肉体だけだ。

Sランクハンターとして培ってきた頭脳、迷宮の知識、そしてあのクズどもへの復讐の執念は微塵も衰えちやいない。

「こんな身体になろうが関係ねえ……！ 絶対に地上へ這い上がって、あいつらの首をへし折ってやる……っ！」

唇を血が滲むほど強く噛み締め、俺は遥か頭上に広がる暗黒の断崖を睥みつけた。

その時だった。

「ギギッ……！ ギギギッ！」

暗がりから濡れた足音を響かせ、緑色の醜悪な皮膚を持つ三匹の影が姿を現した。

ゴブリンだ。ダンジョンにおいては最下級の雑魚モンスター。

長年の戦闘本能が働き、俺は咄嗟に背中へと手を伸ばした。

しかし、手に触れるはずの愛弓の重みはない。伸ばした手が空を切り、脳裏にあの忌々しい破壊音が蘇る。

(……そうだ、あいつらに……折られたんだったな……っ！)

齒噛みしながら、俺は手元に残された唯一の武器、先ほど服を裂くのに使った小さな仕込みナイフを逆手に握り直した。弓もない。矢もない。かつての剛腕も体幹も失われ、手にあるのは頼りない小刀一本のみ。

だが、相手はたかがゴ布林三匹。以前の俺なら、目をつむっていても一瞬で射殺し、粉碎できたような矮小な存在。立ち回りと急所への知識さえあれば、小娘の身体だろうと捌ききれるはずだ。

(……落ち着け。筋力が落ちていようが、奴らの動きは単調そのものだ)

俺は冷静に間合いを測り、飛びかかってきた一匹目の軌道を見切った。

懐へ潜り込み、頸動脈へナイフを深々と突き立てる。

一匹目を瞬殺して急所を断てば、残り二体は必ず怯む。その動揺の隙を突いて仕留めれば、この局面は容易に打開できる。頭の中では完璧な戦術が組み上がっていた。

だが。

ガッ、と鈍い手応え。

(……刃が、通らない……!?)

繰り出したナイフは、ゴブリンの硬い皮膚を浅く切り裂いただけで弾かれた。

小娘の非力な腕力では、致命傷を与えるだけの深さまで刃を押し込むことができないのだ。

「ギギッ!」

傷を負ったゴ布林が怒り狂い、太い腕を振り回して強烈な体当たりを喰らわせてきた。

「んあっ……!」

受け止めるだけの筋力も体幹もない。華奢な身体はいとも容易く宙を舞い、湿った冷たい地面へと無様に転がされた。岩肌を背中を打ちつけ、呼吸が詰まった、そのわずかな隙だった。

「ギギッ!」

「ギギギッ!」

体勢を立て直す間もなく、二体のゴブリンが俺の両手両足の上へ力任せにのしかかってきた。

重い。男だった頃なら片手で払いのけられたような体重が、いまの俺には巨大な岩のようだった。手足が完全に封じられてビクリとも動かない。

「しまった……離せッ！」

もがく俺の顔の横に、残る一匹の醜惡な顔が這い寄ってきた。

ぬらりと伸びた長く粘つく舌先が、無防備な耳の穴の中へと深くねじ込まれ、ぺろんと舐め回される。

「ひゃうっ……!? やめ、やめろ……ッ！」

耳奥を直接犯されるような不快感と、全身を駆け巡る悍ましい悪寒に悲鳴が上がる。

「オンナ！ オンナダー！」

「ヤワラカイ！ イイニオイスル！」

ゴブリンたちは歡喜の奇声を上げながら、巻きつけていただけの衣服をバリバリと豪快に引き裂いた。

布地が千切れ飛び、冷たい洞窟の空気に剥き出しの肌が晒される。醜い太い指が、手のひらに収まるところか平坦な、未発達

達のべたんこな胸元を乱暴に揉みしだき、先端を無遠慮に摘み上げた。

「ああッ……やめろ、触るな……ッ！」

冷たい洞窟の空気が、剥き出しになった太ももや鎖骨を撫でる。胸元の破れ目から、平坦で滑らかな未発達

の肌、ゴブリンたちの湿った吐息がそこに吹きかけられた。

「ヒヒッ、タイラデツルツルダ！」

「コムスメノアナ、イタダキダッ！」

醜惡な爪が、俺の華奢な太ももを左右に強引に割っていく。

その先に覗くのは、泉の呪いによって生み出されたばかりの秘部だった。

嫌惡感で叫び散らす、奴らは嘲笑うかのように俺の細い太ももを左右へと強引に割り広げる。

完全に無防備となった股間の割れ目が、薄暗い洞窟の光の下に晒される。

ジュール、と。

粘つく生温かい舌が、生まれたてのように敏感で無防備な秘部の窪みを、下から上へと一気に舐め上げられた。

「ひゃあんツ!? んああッ、あ、ああッ!」

自分でも信じられないほど甲高い、甘くあられもない悲鳴が喉から跳ね上がる。

ただ舐められただけだというのに、下腹部の奥がきゅんと暴力的に締め付けられ、頭の芯が焼けつくような強烈な痺れが脳髓を直撃した。

(まずい……っ、なんだこれ……!? たかが舌先一つで、身体が……っ!)

泉の変異による過敏さか、それとも女の身体の構造ゆえか。

触れられるだけで全身の力が抜け、拒絶したい意思とは裏腹に、蜜がじわりと溢れ出して止まらない。

(このまま……こんな下等な怪物に、貫かれたら……死ぬ……ッ!)

「やめろ……っ! 頼む、離せ……! 俺は男だ……っ! Sランクハンターのレナリアだぞ……ッ!」

必死にもがき、叫び散らす、華奢な手足は微塵も動かない。

恐怖と羞恥に涙が滲み、男としてのプライドを粉々に砕かれながら、悲鳴混じりの情けない命乞いのような拒絶の言葉が出してしまう。

そして。

ゴブリンの醜く勃起ち上がった太い肉棒が、濡れそぼった俺の割れ目の入り口へと、ぐりぐりと無慈悲に押し当てられた。

(嘘だろ……っ!? こんな……こんな奴らに……っ!)

体中の血が一瞬にして凍りつくような冷たい戦慄が駆け抜けた。

狭小な入り口を押し広げ、無遠慮に奥へと割り込もうとする、逃げ場のない異物の圧力。男としての誇りが、その暴力的な侵食の痛覚と圧迫感の前に、脆くも砕け散っていく。

「や……っ、やめろ……っ! 頼む、入ってくんな……っ、痛い、痛いからあ……ッ!!」

口から転がり出たのは、もはや男の威嚇などではなかった。

ただ暴力に怯え、挿入に震え上がる、名もなき小娘そのものの無様な涙声。

哀れなほど高く掠れた懇願の叫びが、湿った洞窟の岩壁に虚しく反響する。

それを耳にしたゴブリンの醜惡な唇が、下卑た愉悦に歪んだ。

黄色く濁った瞳にねつとりとした狂気を宿し、俺の細い太もをさらに強く掴み直しながら、喉の奥を鳴らして嗤う。

「ギヒッ……」

怪物の生臭い息が、涙で濡れた俺の頬にべったりと吹きかけられた。

「ナケ、モットナケ……グチャグチャニ、オカシテヤルッ！」

「ひっ……あ……っ」

全身の血の気が一気に引き、視界が真つ暗に染まっていく。

言葉の意味が、決定的な絶望となつて脳髓を突き刺した。

抗えない。逃げられない。

かつて大陸の頂点に立とうとしていた俺が、こんな日の当たらない奈落の底で、最下級の汚泥のような怪物どもの慰み者と
して使い潰され、壊されていくのか。

固く目を瞑り、奥歯を軋ませながら、俺は訪れるはずの決定的な破滅の痛みを待った。

その刹那だった。

洞窟の湿った空気を一瞬で真空へと叩き割るような、圧倒的な衝撃波と銀色の閃光。

「ギギャッ!？」

短い断末魔すら途中で掻き消え、俺の上ののしかかっていたゴ布林たちの首と四肢が、血飛沫を撒き散らしながら一瞬に
して四方八方へと弾け飛んだ。

「……なんだ？ 大丈夫か、無事か？」

温かい血飛沫の雨が、俺の剥き出しの肌を濡らす。

恐る恐る目を開けると、そこには息を呑むほどの美貌があった。

腰まで伸びた銀髪は少しくせのあるハーフアップにまとめられ、暗がりの中で燐光を浴びて淡く揺れている。意志の強さを感ぜさせつつも、どこか浮世離れた澄んだ琥珀色の瞳。

身にまとっているのは軽銀甲冑と純白の剣士服だが、女性らしい柔らかな線と肉感を残し、胸当てを押し上げる双丘は服の上からでも圧倒的な存在感を主張している。

そして何より目を奪われたのは、彼女が片手で軽々と下げている鍛え抜かれた鋼の大剣だ。身の丈ほどもある細身の刃先からは、微塵の血糊すら残されていない。

一閃。たった一撃で、ゴブリン三体を屠った武の冴え。

「……助け、られた……のか……？」

「ああ。間に合ってよかった」

女剣士はふつと口元を緩め、優しく微笑んだ。その立ち姿は神々しいほどに頼もしく、歴戦の英雄の風格すら漂わせている。「一人か？ このような最下層近くで」

「いや、その……」

「……ふむ。大方、パーティからはぐれたといったところか。こんな小柄な身で、よく生き残っていたな」

こちらの事情を深く詮索することもなく、女剣士は納得したように頷くと、背の革袋から手際よく大きな布を取り出した。おそらく野営で使う敷布か毛布の類だろう。

「少し汚れているかもしれないが、いまはこれで我慢してくれ。服が破けていては寒かろう」

「あ、ありがとう……」

差し出された布を慌てて身体に巻きつける。咄嗟に礼を言った自分の声が、相変わず可憐な小娘のものであることに内心で舌打ちしたが、相手は気にした風もない。

「私はアルマだ。君の名は……いや、いい。名乗りは後だ。ここはまだ魔物が多いからな。ひとまずダンジョンを出よう」

言うが早いのか、アルマは警戒する隙すら与えず、俺の身体をひよいと抱え上げた。

米俵でも担ぐような気軽さで、彼女の力強い肩の上に軽々と乗せられる。

「あ、おい！ 待て、降るせ！ 自分で歩ける……ッ!?」

「そう言うな。この方が早い」

問答無用だった。小娘の貧弱な腕でいくら彼女の頑丈な甲冑を叩いたところで、痛がりもしないどころかビクともしない。
（くそっ……女に米俵みたいに担がれるなんて、どんな屈辱だよ……!）

元・Sランクハンターのブライドが激しく軋む。だがそれ以上に、耐え難い問題があった。

布でくるんでもらったとはいえ、急ごしらえの目隠しだ。アルマの背中に担ぎ上げられた俺の視界には、彼女の引き締まった腰つきと豊かな太ももが嫌でも飛び込んでくる。そして同時に、俺自身の剥き出しに近い下半身が、彼女の肩口越しに無防備に晒されている形になっていた。

歩く振動に合わせて布の隙間から冷たい風が入り込み、秘所を撫でていく。

（……っ、恥ずかしいなんてもんじゃねえぞ、これ……!）

顔から火が出るほど羞恥がこみ上げてくる。これも身体が女になって過敏になっているせいだろうか。

いや、違う。元が男だろうが女だろうが、こんな格好で他人の肩に揺られてダンジョンを移動させられたら、誰だって死ぬほど恥ずかしいに決まっている。

だが、当のアルマはといえば、俺の気恥ずかしさなど露ほども察していない様子で、大剣を片手に涼しい顔で大股に歩を進めていた。

ダンジョンの暗く湿った空気を抜け、木漏れ日が柔らかく差し込む森の湖畔。

アルマは俺を優しく地面に降ろすと、自分の旅用マントを脱いで、俺の華奢な肩へとふわりと羽織らせてくれた。

「ふう……ここまで来ればもう魔物の心配もない。ひとまず安心だな」

大剣を傍らの大岩に立てかけ、アルマは屈託のない笑みを浮かべる。

俺は湖畔の草地に腰を下ろし、身体に巻き付けた布の端をマントの下でぎゅつと握りしめた。冷たい風が水面を揺らし、破れた服の隙間を撫でていく。

(……さて、どう立ち回るべきか)

湖面に映る自分を横目で見るまでもなく、今の俺はどこからどう見ても無力な小娘だ。

そして何より、あのクスどもが地上へ戻っているなら、俺は名誉の戦死を遂げたことになっているに違いない。下手に本名を名乗ったり、不審な態度を取って噂が立てば、復讐を果たす前にあいつらに警戒されるか、最悪の場合、口封じに消される。ここは死んだはずの男ではなく、運良く生き延びただけの無力な冒険者として、少し怯え気味の演技でやり過ごすのが一番合理的だ。

「寒いか？ 顔色が少し悪いようだが」

氣遣わしげに覗き込んでくるアルマに、俺は肩を少しすくめ、わざとらしく視線を伏せてみせた。

「い、いえ……大丈夫、です……」

(くそっ……女の真似事なんて死んでもごめんだが、背に腹は代えられねえ……っ！)

男の矜持が悲鳴を上げているのを必死で押し殺し、か細く頼りない小娘の声を作って見せる。

「そうか。ならいいのだが……私はアルマ。しがたない剣士だ。君のお名前は？」

「……レナリ……じゃなくて、レナ、です。助けてくれて、ありがとうございます」

上目遣いに、怯えと感謝を混ぜ合わせた完璧な表情。

伊達に数多の交渉や修羅場を潜り抜けてきたわけじゃない。この手の猫かぶりなど、通り一遍の冒険者相手なら造作もなく騙せるはずだ。

「レナか。可愛い名だな。して、レナ。君のような駆け出しの若い新人が、なぜあんな深層近くの危険なエリアにいたんだ？」

「あ、はい……！ 私、最近ハンターになったばかりの新人で……浅い階層で珍しい薬草を摘むのに夢中になっていたから、うっかり足を滑らせて下の階層まで転がり落ちちゃって……っ。もう怖くて、どうしようかと……本当に運が良かったです、アルマさんみたいな強い人に拾ってもらえて！」

ペラペラと無垢な少女の台詞を並べ立て、ぎこちない愛想笑いを浮かべてみせる。

これだけ弱々しく怯えてみせれば、お人好しの女剣士なら「よしよし、もう安心だぞ」と頭でも撫でて納得するはず。そう目論んでいたのだが。

アルマは瞳をすつと細め、俺の顔を無言で見つめた。そして、静かに首を横に振った。

「嘘だな」

「……え？」

「君は駆け出しなどではない……そうだな、命の危機に瀕した時の身体の裁き方、足さばき、そして何より、今の私を品定めするように見つめる、その眼光の鋭さ。どれほど命の修羅場を潜り抜ければ、そんな目つきになる？」

一瞬で、湖畔の空気が凍りついた。

アルマの表情から、先ほどまでののんびりとした気配が完全に消え去っていた。

本物の強者だけが持つ、相手の魂の芯を冷徹に射抜く鋭い眼光。

その揺るぎない視線に射すくめられ、俺の喉元で、用意していた次の嘘がびたりと凍りついた。

（……ちっ！ この女、見た目以上にキレる……！）

俺の立ち振る舞いから、一瞬で強者の匂いを嗅ぎ取ったのだ。

だが、ここでハイそうですかと白状するわけにもいかない。俺は即座に表情を切り替え、困ったように眉尻を下げて小首を傾げてみせた。

「い、いやですよアルマさん、何を言い出すんですか……！ お、脅かさないでくださいよ。私は本当にただの駆け出しで……っ」

「駆け出しが、ゴブリンに組み伏せられた瞬間、頸動脈と関節の位置を正確になぞって反撃の機を窺うか？ あの気配は最低でも数百回は実戦で肉を断ってきたものだ」

「そ、それは……！ 昔、実家の獵師の父にみっちり仕込まれたんです！ 山で熊や狼を解体する手伝いをずっとさせられてたから、急所を狙う癖がついてるだけで……！」

我ながら完璧なアドリブだ。獵師の娘という設定なら、ある程度の刃物の扱いも獣への身のこなしも綺麗に筋が通る。

だが、アルマは淡々と、瞳をわずかに細めるだけだった。

「熊や狼を捌く獵師が、相手の重心のブレと呼吸の吐き出しに合わせて間合いを測るのか？」

「な……っ」

「それに、その指先だ。解体用の刃物を握る手つきじゃない。もつと硬く、重い弦を限界まで引き絞り続けてきた射手特有の、強靱なタコと筋肉の記憶が骨に残っている。……まだ続けるか、レナ？」

淡々とした、しかし一切の反論を許さない鋭利な観察眼。

完全に一流の武芸者の視点で解体され尽くしていた。

（……完敗だ。この女、天然で抜けるように見えて、武の領域に限つちや化け物じみた嗅覚してやがる……!）

これ以上、小娘のフリをして取り繕うのは時間の無駄だと悟った。

俺は深く、重いため息を吐き出すと、被っていた猫の皮をかなぐり捨てるように頭をガシガシと乱暴に掻きむしった。

森の太い幹に背を預け、ふてぶてしく片膝を立てて脚を組む。すっかりいつもの男の仕草に戻り、ドスの利いた口調を少女の喉から吐き捨てた。

「……あー、くそっ！ よくそこまで見抜いたな、剣士様よ」

「口調まで変わったな。やはり、訳ありか？」

「ああ、大アリだ……信じられねーかもしれないが、俺は元は男だ。Sランクハンター、レナリアだ。ダンジョンで信頼してた仲間のクズども三人に裏切られてな。背中から刺され、毒を飲まされ、奈落に落とされた。目覚めたら……」
「覽の通り、こんな貧乳の小娘にされてたつてワケだ」

自虐的に平坦な胸元を指先で叩くと、アルマは驚く風もなく、瞳を静かに細めた。

「なるほど。レナリアか。その名なら風の噂で聞いたことがあるぞ。東部戦線を単独で制圧した『最速の神射手』……Sランクハンターとして有名だな」

「へえ、有名税つてやつか。逆に俺はお前なんて知らねえけどな。さっきのゴブリンへの一太刀を見る限り、相当強いだろ」
「私は特定のギルドに所属していないからな。風の吹くまま各地を転々と移動している。知られていなくても無理はない」

「『強い』ってこと自体は、これっぽっちも否定しねえんだな」

「当然だ。強いからな」

ニツと屈託のない笑みを浮かべるアルマ。圧倒的な実力者特有の、嫌味のない自信だ。

だが次の瞬間、アルマはどこか呆れたような苦笑を浮かべ、俺の股元をすつと指さした。

「どうでもいいが、レナリア。今は自分が少女の身体だということを自覚しろ……脚をそんなふうにくむと、布の隙間から大事な割れ目が丸見えだぞ」

「なっ……!?」

慌てて脚を閉じ、マントと布をかき集めて太ももの間を隠す。顔が一気にカッと熱くなった。

「み、見るんじゃねえよ、ド変態……っ!」

「お前が無防備に見せてきたんだろうが。まったく、中身がどれほど歴戦の猛者だろうと、形は可憐な生娘なんだから気をつけろ」

ため息をつくアルマを涙目で睨みつけながら、俺は胸の奥で燦る黒い焰を吐き出すように続けた。

「……とにかく、だ。俺の手柄も名声も、全部あいつらに横取りされた。だから俺は……何が何でも地上へ戻り、あいつらをどん底に叩き落として復讐しなきゃならねえんだ。こんな身体になっちゃったが、絶対に許さねえ」

拳を固く握りしめ、悔しさに奥歯を噛む。

すると、話を聞き終えたアルマは、ぼんと自分の手のひらを打った。

「なるほど。お前の境遇は十分理解した……よし、私も復讐に協力してやろう」

「……………は？」

あまりにあっさりとした申し出に、俺は思わず気の抜けた声を漏らした。

「話を聞く限り、お前は何か悪いことをしていない。悪いのはその卑劣な三人だ。特に、ハンターにとつて命とも言える愛用の弓を折られたくだけは、同じ武芸者として断じて許せん。私が手を貸そう」

大剣の柄に手を添え、至極真面目に言い切るアルマ。

その頼もしすぎる言葉に、俺は毒気を抜かれつつも、小さく肩をすくめてため息をこぼした。

「……そう言ってくれるのはありがたいがよ、アルマ。俺が全部嘘八百を並べてたらどうするんだ？ 見ず知らずの小娘の言うことを、そうすんなり信じるもんじゃないぜ」

「それは心配いらん。お前が嘘をつく必要がないからな」

アルマは瞳をまっすぐに向け、悪戯っぽく唇の端を吊り上げた。

「そんな非力な小娘の身体になって、この森で私とはぐれてみる。街に着く前に野盗か魔物に捕まって、散々犯されてホイっとされるのが関の山だぞ？」

「ぐっ……」

凶星を突かれ、言葉に詰まる。

「お前は喉から手が出るほど私の協力が欲しいはずだ。だったら素直に頼めばいいものを、Sランクハンター様はプライドが高いからな。だから私が気を利かせて、率先して言ってやったんだ」

「……おい。お前は頭がキレるのか抜けてるのか、どっちなんだよ？」

呆れ果てて問い詰めると、アルマは胸当てをドンと叩いて爽やかに笑った。

「こゝと戦闘と人の嘘を見抜くことに関しては負けない自信があるぞ。それに、もしお前が私を騙しているのなら、その時はこの大剣で真つ二つに斬り捨ててしまえばいいだけだ。何も問題ないだろう？」

「……………おつかねえな、この脳筋女」

背筋に冷たい汗が流れる。本物の強者が放つ、底知れない凄み。

だが、その恐ろしさの裏にあるどこかカラツとした気安さに、俺の張り詰めていた肩の力がふっと抜けていくのを感じた。

「ふむ。可愛い見た目の小娘が吐くドスの利いた皮肉は、なかなか風情があつて美しいぞ、レナ」

「レナリアだつーの……っ！」

憎まれ口を叩き合いながらも、冷えた湖畔の風の中に、妙に心地いい共犯者の空氣が満ちていく。

小娘に落とされた元・最強射手と、規格外の強さを持つ天然の女劍士。

どこか狂ったふたりの共闘関係は、こうして奇妙な信頼とともに結ばれた。